

第 7 回（平成 21 年度・平成 22 年度・平成 23 年度）
教育システム改善のためのアンケート調査報告書

平成 23 年 7 月

有明工業高等専門学校
学校運営検討委員会

目 次

1 . まえがき	1
2 . アンケート結果およびその分析	3
2.1 5 年生卒業時アンケート	3
2.2 専攻科生修了時アンケート	7
2.3 新入生保護者アンケート	9
2.4 2 年生保護者アンケート	11
2.5 4 年次編入生アンケート	14
3 . あとがき	15

付録 アンケート内容と集計結果

- 付録 1 5 年生卒業時アンケート（平成 22 年 2 月実施・平成 23 年 2 月実施）
- 付録 2 専攻科生修了時アンケート（平成 22 年 2 月実施・平成 23 年 2 月実施）
- 付録 3 新入生保護者アンケート（平成 22 年 3 月実施・平成 23 年 3 月実施）
- 付録 4 2 年生保護者アンケート（平成 22 年 9 月実施）
- 付録 5 4 年次編入生アンケート（平成 22 年 3 月実施・平成 23 年 5 月実施）

1. はじめに

本校では、教育理念に基づいて設定された学習・教育目標を達成できるように教育プログラムを作成し、日々の教育活動を行っています。この教育プログラムに沿って教育を行っているという本校の教育システム（教育体制）は、常に点検・評価を行い、その結果を検討・分析し、改善を継続的に行い、向上させて行く必要があります。学校運営検討委員会（以下、本委員会）は、本校の教育システムの改善の一環として、学内外においてアンケートを実施してきました。アンケートの対象者は、学内では卒業直前の本科 5 年生・修了直前の専攻科 2 年生・4 年次編入生、学外では OB（卒業生）・企業・新入生の保護者・2 年生の保護者です。そして、次頁の表にあるように、このアンケートの結果を集計・分析・評価・公開し、改善点等を指摘した「教育システム改善のための調査報告書」（以下、調査報告書）として報告し、教育システムの向上の一端を担ってきました。

今回の調査報告書は、平成 21 年度の卒業直前の本科 5 年生・修了直前の専攻科 2 年生・平成 21 年度新入生および 2 年生の保護者・平成 22 年度 4 年次編入生、平成 22 年度の卒業直前の本科 5 年生・修了直前の専攻科 2 年生・平成 22 年度新入生および 2 年生の保護者・平成 23 年度 4 年次編入生を対象に行ったアンケートを集計し、過去の結果と比較して分析を行ったものです。上記アンケート対象者による今回の評価結果に関しては、全体としては、本校の教育システムはおおむね良好な状態であると言えます。5 年生・修了生による評価では、周囲や世界の情勢を感じてか、英語の必要性の自覚が高いのに対し、その達成には困難さを感じている。一方、数学の到達度が高いことに特徴があります。このことは、この 3 年間に高専機構で行われた学習到達度試験によると、対外的にも本校の数学の平均点が九州の平均点だけでなく、全国の平均点に対しても高い事実を裏付けています。

細かく見ると、改善が進んでいる事項もあれば、数年間に渡り改善が進まない事項もあります。本調査報告書の意義は、前述したように、本校の教育システムの改善を促すことです。依然として改善が見られない事項に関しては、関係の教員・組織は、そのことを認識して改善に取り組む必要があると思われます。本調査報告書が本校の向上に資することを切望する次第です。

表 アンケート実施および分析状況の一覧

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	作業状況	報告年月	備考	
第 1 回	平成 14 年度	平成 15 年 2 月 平成 15 年 1 月	H14 年度本科卒業生 H14 年度専攻科修了生	分析完了 報告書公開	平成 16 年 3 月	JABEE 作業部会	
	平成 15 年度	平成 15 年 7 月 平成 15 年 11 月	OB 主な就職先企業				
第 2 回	平成 15 年度	平成 16 年 1 月 平成 16 年 2 月	H15 年度専攻科修了生 H15 年度本科卒業生	分析完了 報告書公開	平成 17 年 6 月	JABEE 作業部会	
	平成 16 年度	平成 16 年 6・9 月	OB				
第 3 回	平成 16 年度	平成 17 年 2 月 平成 17 年 2 月	H16 年度本科卒業生 H16 年度専攻科修了生	分析完了 報告書公開	平成 19 年 6 月	学校運営 検討委員会	
	平成 17 年度	平成 17 年 12 月 平成 17 年 12 月	OB 主な就職先企業				
第 4 回	平成 17 年度	平成 18 年 2 月 平成 18 年 1 月	H17 年度本科卒業生 H17 年度専攻科修了生	分析完了 報告書公開	平成 19 年 7 月	学校運営 検討委員会	
	平成 18 年度	平成 18 年 4 月 平成 18 年 7 月	H18 年度新入生保護者 H18 年度 2 年生保護者				
第 5 回	平成 18 年度	平成 19 年 2 月 平成 19 年 1 月	H18 年度本科卒業生 H18 年度専攻科修了生	分析完了 報告書公開	平成 20 年 6 月 (平成 20 年 9 月)	学校運営 検討委員会	
	平成 19 年度	平成 19 年 4 月 平成 19 年 4 月 平成 19 年 8 月	H19 年度新入生保護者 H19 年度編入生 H19 年度 2 年生保護者				
		平成 19 年 12 月 平成 20 年 2 月 平成 20 年 2 月 平成 20 年 3 月	OB 主な就職先企業 H19 年度本科卒業生 H19 年度専攻科修了生 H20 年度新入生保護者				
		平成 20 年度	平成 20 年 4 月 (平成 20 年 9 月)				H20 年度編入生 (H20 年度 2 年生保護者)
第 6 回	平成 20 年度	平成 21 年 2 月 平成 21 年 2 月 平成 21 年 3 月	H20 年度本科卒業生 H20 年度専攻科修了生 H21 年度新入生保護者	分析完了 報告書公開	平成 21 年 9 月	学校運営 検討委員会	
	平成 21 年度	平成 21 年 4 月 平成 21 年 9 月	H21 年度編入生 H21 年度 2 年生保護者				
			平成 21 年 8 月 平成 21 年 8 月	OB 主な就職先企業	分析完了 報告書公開		平成 22 年 2 月
第 7 回	平成 21 年度	平成 22 年 2 月 平成 22 年 2 月 平成 22 年 3 月	H21 年度本科卒業生 H21 年度専攻科修了生 H22 年度新入生保護者	分析完了 報告書公開 予定	平成 23 年 7 月	学校運営 検討委員会	
	平成 22 年度	平成 22 年 4 月 平成 22 年 9 月 平成 23 年 2 月 平成 23 年 2 月 平成 23 年 3 月	H22 年度編入生 H22 年度 2 年生保護者 H22 年度本科卒業生 H22 年度専攻科修了生 H23 年度新入生保護者				
		平成 23 年度	平成 23 年 4 月				H23 年度編入生

2. アンケート結果およびその分析

2.1 5 年生卒業時アンケート

現在までに実施した 5 年生卒業時アンケートの実施時期等は下表のとおりである。今回の分析は、平成 21 年度および平成 22 年度の卒業生が対象である。なお、ここでの「対象者数」とは、5 年生の卒業生数（『学校要覧』等参照）、「回答者数」はアンケート実施時に出席していた学生数を意味する。

	実施時期	対象者数 (名)	回答者数 (名)	回答率 (%)
平成 14 年度	平成 15 年 2 月	177	161	91
平成 15 年度	平成 16 年 2 月	165	160	97
平成 16 年度	平成 17 年 2 月	190	180	95
平成 17 年度	平成 18 年 2 月	186	178	96
平成 18 年度	平成 19 年 2 月	192	178	93
平成 19 年度	平成 20 年 2 月	167	163	98
平成 20 年度	平成 21 年 2 月	171	168	98
平成 21 年度	平成 22 年 2 月	185	171	92
平成 22 年度	平成 23 年 2 月	174	170	98

【A：回答者自身に関する質問】

平成 21 年度の 5 年生は在籍者数 189 名、卒業生数 185 名、入学当時（平成 17 年度 1 年次）は 210 名在籍していた（前年度の休学者・留年者数を含む）。

卒業後の進路については、これまでと大きな変化はみられない。学科別では、電子情報工学科で『就職』率が 38% から 55% に増加し、物質工学科で 74% から 46% に減少したことが特徴といえる。

なお、『第 6 回報告書』では、卒業生数の減少を「留年者数の増加」が一因として対策を講じるよう指摘していた。平成 20 年度と比べると卒業生数が増加しているが、それが「留年対策」の効果かどうかは別に精査する必要があるだろう。

次に、平成 22 年度の 5 年生は在籍者数 177 名、卒業生数 174 名、入学当時（平成 18 年度 1 年次）は 219 名在籍していた（前年度の休学者・留年者数を含む）。

平成 22 年度について断らなければならないのが、機械工学科 36 名の内 32 名は自分の所属を M と回答しているが、4 名は E と回答している点である。同様に、物質工学科 35 名の内 1 名は M、建築学科 33 名の内 2 名は C と回答している。単なる記入ミスと思われるが、アンケート結果の信憑性にも関わらねないため、アンケート回答時に注意を喚起する必要があるだろう。

さて、卒業生数については、174 名と平成 21 年度と比べると減少している。また、卒業後の進路については、全体的には『就職』の割合が減少し、『進学』の割合が増加している。ただし、物質工学科は逆の傾向を示していることが特徴といえる。

【B：教育全般の総括に関する設問】

平成 21 年度について、一般教育の『満足度』¹ は 72% と近年の増加傾向から反転しており、電気工学科以外の 4 学科で減少している。専門教育の『満足度』は、77% とこちらも減少しており、電気工学科・物質工学科以外の 3 学科で減少している。特に、建築学科は 90% から 67% と最も減少幅が大きい。逆に、物質工学科は 83% から 93% と上昇し、専門教育に対して最も満足度の高い学科となった。教育設備の『満足度』は 78% である。『第 6 回報告書』で指摘された建築学科の満足度は今回 72% と回復している。逆に、物質工学科は 71% と減少している。勉強以外の学生生活の『満足度』は、82% と高い結果を

¹ [満足度] の設問では、回答の選択肢に『満足している』『おおむね満足している』『やや不満である』『不満である』の 4 つがあるが、この 4 つの回答合計数の中で肯定的な『満足している』『おおむね満足している』の回答数のパーセンテージを『満足度』とここでは定義している。また、[到達度] [必要性] [教育実情] も同様である。

維持しているが、電気工学科と電子情報工学科以外の3学科では減少している。『第6回報告書』では「年度によるクラスの雰囲気等」の影響を指摘しているが、他に原因はないのだろうか。学生自身の『到達度』は、65%と減少。特に、電子情報工学科と建築学科は50%前後と学生自身の自己評価とはいえ低調である。「実力がついた」と多くの学生が答えられるよう、各学科のみならず全学的な対応も検討する必要があるかもしれない。一般教育・専門教育・教育設備・学生生活の『満足度』は、70%以上で全体として「良好」といえるだろう。『到達度』については、今後さらなる増加が期待される。

次に、平成22年度について、一般教育の『満足度』は、81%と増加、電気工学科のみ減少している。専門教育の『満足度』は、82%と増加、電子情報工学科・建築学科は大きく増加している。教育設備の『満足度』は、69%と減少、物質工学科以外で減少しているが、何か設備等に変更があったのだろうか。勉強以外の学生生活の『満足度』は、81%とほぼ横這い。電気工学科の減少が気になる（当該年度は全体的に評価が厳しいようである）。学生自身の『到達度』は、68%と微増。特に電子情報工学科と建築学科は専門教育の『満足度』同様に大きく増加している。学科での取り組みが功を奏したのであれば、その内容を共有したいところである。一般教育・専門教育の『満足度』は、80%以上で全体として「良好」といえるだろう。教育設備・学生生活の『満足度』・『到達度』については、今後ともさらなる増加が期待される。

【C：科目教育に関する設問】

● 一般科目

平成21年度について、一般科目全体としては前回までとほぼ同様の結果であった。どのパーセンテージで良しとするかは評価が分かれるかもしれないが、少なくとも過半数（50%）に達しなかった科目に関しては、改善が望まれる。特に、「美術」「音楽」はその必要性を学生に理解されていない状況が伺えることから、授業担当者のもとより、一般教育科として対策を講じる必要がある。低学年で受けた授業を5年生の卒業時に評価しているのだから、改善の効果が現れるのにタイムラグはあるかもしれない。

また、『必要性』と『到達度』について、文科系科目では特に英語におけるギャップが目立つ。つまり、多くの学生は英語の必要性を十分強く認識しているにもかかわらず、卒業時には自分が必要としているレベルには達していないと感じている。一方で、数学の到達度は比較的高い、というのが特徴といえる。

平成22年度についても、これまでとほぼ同様の結果であった。少なくとも過半数（50%）に達していない科目（付録を参照）に関しては、改善が望まれる。特に、「美術」「音楽」の『必要性』、「英語」の『到達度』については、低い数値で推移していることから、さらなる対策を講じる必要がある。

● 専門科目

○ 機械工学科

平成21年度については、特筆すべきコメントなし。平成21と比較して、平成22年度は『必要度』、『適正度』、『到達度』すべてにおいて少し低下しているものの、全体的には高い値を維持している。特に、工学基礎系科目の『適正度』および加工系科目の『到達度』が前年度より低いことが目立つ。

○ 電気工学科

平成21年度については、特筆すべきコメントなし。平成22年度についても同様で、特筆すべきコメントなし。

○ 電子情報工学科

平成21年度については、電子工学系科目や総合領域の科目の到達度に比べ情報工学系科目の到達度は比較的高いと認識している学生が多い。平成22年度については、その差がほとんどなくなっている。専門科目を除いて、どの科目も必要度に比べ、『適正度』、『到達度』は半減する傾向にある。

○ 物質工学科

平成20年度、平成21年度、平成22年度で「物質工学科専門科目計」は『必要度』、『適正度』、『到達度』がおおむね80%以上で、変動もほとんどなく、現在の「物質工学科専門科目（教育システム）」は大きな問題はないと考えられる。詳細にも、基本的には各項目10%程度の増減で推移しており、上述のように教育システムの適正がみてとれる。なお、平成21年度の「基礎的な生物」、「基礎的な工学基礎」の『到達度』の項目は比較的低い傾向（60%程度）にあるが、平成22年度では平成20年度のレベルに回復しており、大きな経年変化ではなかったと考えられる。また、「生物コース」の科目の『到

達度』は 3 年間、60 % 近傍で推移しており、今後の動向によってはシステムの改善が必要かもしれない。

○ 建築学科

『必要性』について、平成 21 年度では、特に構造系科目に対する必要性が高く、必要性は約 90 % である。平成 22 年度では、計画系科目に対する必要性が若干低下していた。『教育実状』について、平成 21 年度では、環境系科目が他の科目より低く、適正度は約 50 % 程度である。しかし、平成 22 年度において、環境系科目の『教育実状』は他の科目と同程度の適正度となっている。『到達度』について、平成 21 年度では、環境系科目が他の科目より低く、到達度は約 40 % 未満である。この結果は、教育実状の低適性度が影響しているのかもしれない。平成 22 年度では、計画系科目 1 が他の科目より低く、到達度は約 55 % である。

【 D : 学習・教育目標に関する設問】

平成 21 年度について、A-3 の『適正度』について、電子情報工学科と建築学科が他の学科と比較してかなり低い。次に、『到達度』について、電子情報工学科と建築学科が 20 ~ 30 % 台と非常に低い。『適正度』と合わせ、この結果に対する検証については急務を要すると考えられる。また、すべての学習・教育目標に対して、電子情報工学科と建築学科が他の学科よりもかなり低い傾向がある。

平成 22 年度について、平成 21 年度は多くの学習・教育目標に対して、電子情報工学科と建築学科が他の学科と比較してかなり低かったが、平成 22 年度は特定の学科のみ低い結果というのではなく、全体的にどの学科も同じような評価であった。その結果、どの学習・教育目標も全体的に見ると昨年度よりも少し改善しており、全体の平均値は『適正度』は 80 % 程度、『到達度』は 75 % 程度となっている。

【 E : その他に関する設問】

● TOEIC 関係の英語教育

平成 21 年度については、電子情報工学科と建築学科では 60 % 前後であり、他学科よりも 20 % 程度低いのが目立つ。平成 22 年度については、建築学科では 53 % と他学科よりも低く、平成 21 年度の場合と同様に低調なのが目立つ。なお、平成 21 年度では最も低かった電子情報工学科が 30 % 程上昇している。TOEIC 関係の英語教育（4 年次および 5 年次）を 1 年間で大幅に変更したとは思えないので、単なるクラスによる違いなのか授業担当者による違いなのか、担当部署は確認をお願いしたい。

● 1 ~ 3 学年次の LHR

平成 21 年度については、現在の LHR について、有意義であるとは考えていない学生がかなりの割合でいる。これについては、各学科（一般科も含め）や担任会でその原因について検討すべきである。平成 22 年度についても、平成 21 年度と同様、LHR について有意義であるとは考えていない学生が 30 % 程度いる。これについては、各学科や担任会でその原因および改善策について検討すべきである。

● シラバスは役にたったか

平成 21 年度については、『役に立った』、『それなりに役に立った』との回答が、機械工学科では 77 %、建築学科では 32 % となっており、これは昨年度と全く反対の傾向であった。シラバスの使用方法について、各年度で大きく異なるとは考えられず、学生にとって役に立つシラバスとはどのようなものかについて検討しなければならない。平成 22 年度については、『役に立った』、『それなりに役に立った』との回答が、全体的には 70 % であり、昨年度よりも 15 % 改善している。特に、建築学科では平成 21 年度は 32 % だったが、平成 22 年度は 81 % まで急上昇している点が注目すべきところである。建築学科でシラバスの役立て方に対する取組が何か行われたのか、もしくは単にクラスの違いによる差なのか検討していただきたい。

● レポート等のフィードバックはどうだったか

平成 21 年度については、物質工学科は昨年度同様に高い評価であり、物質工学科でのレポートなどのフィードバック方法を全学科に紹介するなどの対策は有益であると考えられる。平成 22 年度については、『適正』、『おおむね適正』との回答が、平成 22 年度は平成 21 年度よりも平均で 10 % 程度増加している。特に建築学科では 47 % だったのが 81 % に急上昇しているが、建築学科でレポート返却の改善がなされたのかどうか気になるところである。

● 授業時間外の学習指導体制（補習・オフィスタイム制度）の制度の実状

平成 21 年度については、『機能していた』、『それなりに機能していた』との回答は、電子情報工学科と建築学科では他学科と比べて低い。授業時間外の学習指導体制を改善する努力をお願いしたい。平成 22 年度については、『機能していた』、『それなりに機能していた』との回答は、電気工学科と電子情報工学科では他学科と比べて低い。授業時間外の学習指導体制を改善する努力をお願いしたい。

● 授業改善アンケートの反映

平成 21 年度については、『よく反映されている』、『おおむね反映されている』との回答は、電子情報工学科と建築学科で非常に低い。反映させたかは別として、対応について学生に積極的に説明していく必要があると思われる。平成 22 年度については、『よく反映されている』、『おおむね反映されている』との回答が、平成 21 年度と同様に電子情報工学科と建築学科で非常に低い。2 年連続で低い評価であることに對する対応策を検討していただきたい。

● 学修単位の科目で自学自習に取り組みましたか

平成 21 年度については、『取り組んだ』、『ある程度取り組んだ』との回答は、全学科で 50 % 程度と比較的低い。学修単位の科目について、その分類の意味を学生に説明し、自学自習を積極的に働きかけていくべきである。平成 22 年度については、『取り組んだ』、『ある程度取り組んだ』との回答は、全学科で 60 % 程度と平成 21 年度と同様に比較的低い。学修単位の科目に対する取組について、学生に理解を促す努力をより一層すべきである。

● 寮の運営・指導

平成 21 年度については、特に注目すべき点は『よくなかった』を選択した学生が非常に多かったことである。これについては関係各所で調査を行い、よくなかった点を明らかにしていただきたい。平成 22 年度については、『よかった』、『おおむねよかった』との回答が全体平均で 68 % と平成 21 年度よりも 10 % 程度増加しているものの、まだまだ改善の余地があると思う。よくなかった点の把握をしていただき、改善できるところは改善をお願いしたい。

【自由意見】²

多くの意見がでたが、特定の要望は特にない。比較的建設的な意見のように思われるものを以下に記述する。

- ・一般科目や専門科目実験を 5 年間を通じてもっと関連づけたカリキュラムにして欲しい。
- ・実験レポートは添削して返却してほしい（特に 3 年次）。
- ・学外単位はもっと実用的ものを習得したら単位認定してほしい（情報処理技術者試験の認定など）。
- ・アンケートが長いので、まじめに答えられない人もおり、参考になりづらいのではないかと。
- ・修得単位の状況が分かりにくい。もっとシンプルにしてほしい。

² 本報告書には、【自由意見】の詳細（学生が記述した内容）を記載していない。詳細を知りたい場合は、学校運営検討委員会委員にお尋ねいただきたい。なお、次頁以降の各アンケートにおいける【自由意見】についても同様である。

2.2 専攻科修了時アンケート

現在までに実施した専攻科生修了時アンケートの実施時期および回答者数等は以下のとおりである。

	実施時期	対象者数 (名)	回答者数 (名)	回答率 (%)
平成 14 年度	平成 15 年 1 月	23	23	100
平成 15 年度	平成 16 年 1 月	18	17	94
平成 16 年度	平成 17 年 2 月	19	19	100
平成 17 年度	平成 18 年 1 月	27	27	100
平成 18 年度	平成 19 年 2 月	24	24	100
平成 19 年度	平成 20 年 1 月	23	23	100
平成 20 年度	平成 21 年 2 月	33	33	100
平成 21 年度	平成 22 年 2 月	41	34	83
平成 22 年度	平成 23 年 2 月	33	25	76

多くの設問において、回答合計数に対する肯定的な回答数のパーセンテージを表記している。ただし、本アンケートの対象者数は少なく、特に各専攻や系での分析では、回答者数が少ないことを留意していただきたい。

【 A : 回答者自身に関する質問】

修了生の進路は進学率が 34 % (平成 21 年度)、36 % (平成 22 年度) で、例年とほぼ同じである。専攻科生の進学意識に大きな変化はなかったと思われる。また、アンケート回答率がここ数年 100 % だったのに対し、83 % (平成 21 年度)、76 % (平成 22 年度) と年々低くなっている。原因まではここでは判断できないが、アンケート対象者がもともと少ないものであるため、今後はなるべく 100 % になるように工夫する必要があると考える。

【 B : 教育全般の総括に関する設問】

平成 21 年度の専門科目において、建築学専攻の学生の評価が低い点が気になる。特に、教育・研究環境に対する満足度の評価については、平成 20 年度も低かったようである。なお、平成 22 年度も同様の結果が見られる。専攻科のカリキュラムと建築学専攻学生のイメージとのギャップがあったように思われる。

次に、平成 22 年度の教育・研究環境についての満足度において、建築学専攻の学生の評価が低い点が気になる。また、期待していた実力が付いたかどうかの設問に対して、機械系の学生の評価が低い。しかし、全体的に低いことから、少し謙遜気味な評価になっている可能性があり、それほど深刻にとらえる必要はないように考える。

【 C : 科目教育に関する設問】

平成 21 年度の専門基礎科目 (数学・物理・化学・環境科学) の到達度において、建築学専攻が低い点が気になる。次に、創造設計合同演習の到達度のアンケート結果も低い。特に、機械系、電気系、建築学専攻が低い点が気になる。これは、平成 20 年度の結果とほぼ同じである。更に、地域協働演習 I・II、地域協働特論に対する電気系学生の評価が低い。これも、平成 20 年度の結果とほぼ同じである。最後に、一般科目、専門基礎科目、複合的資質を育成する科目の座学系科目において、到達度の『身に付いた』という評価が全専攻評価で 10 % 未満と低い数値になっている点が気になる。これも、平成 20 年度の結果とほぼ同じである。また、特別実習 II のアンケートにおいて、5 名の回答があるが、その受講者数から考えて明らかにおかしい結果である。これについても、平成 20 年度と同様の結果である。

平成 22 年度においては、一般科目 (英語・日本語・社会科目) の到達度において、機械系の学生の評価が低い点が気になる。また、技術英語の到達度において、機械系の学生、建築学専攻の学生の評価が低い点が気になる。機械系の学生は、教育実状の評価も低い。更に、創造設計合同演習の必要性において、建築学

専攻の学生の評価が低い点が気になる。これらについては、前年度も決して評価が高くないので、継続性が見られるようである。

最後に、特別実習 II の到達度において、前年度同様、科目履修者数とアンケート回答者数があっていない。

【D：学習・教育目標に関する設問】

平成 21 年度、平成 22 年度について、『適正度』はほとんどの項目で 70 % 以上(平成 22 年度：A-3 のみ 64 %)であり、学生たちは学習教育目標における各項目の[教育実状]が適正であると認識していると考えられる。また、『到達度』は A-3 のみが両年度および平成 20 年度で 60 % を切っている(平成 20 年度：41 %，平成 21 年度：54 %，平成 22 年度：56 %)。平成 20 年度、平成 21 年度、平成 22 年度での変化を見てみると、特定の年度のみが「高い値 (80 % 程度以上)」あるいは「低い値 (60 % 程度以下)」を示している項目が多いことから、A-3 の低さは際立っていると言える。このことから、コミュニケーション関連の授業の『到達度』の向上をはかる教員の努力が必要であろう。また、『到達度』では『身に付いた』という最上位の回答が少ない (10 % 未満) 傾向である。このことは、確実に身につけて修了していないという思いを持っている学生が多いことを意味しており、到達度を向上させることが今後の専攻科の課題になるだろう。

【E：その他の設問】

本設問において、平成 20 年度、平成 21 年度、平成 22 年度で、特定の年度のみが「高い値 (80 % 程度以上)」あるいは「低い値 (60 % 程度以下)」を示している項目が多く、これは各年度の学生の個性に依存する結果であると思われる。そのような変動が多い中で、専攻科における少人数の授業形態の『満足度』、学会での発表の『有益性』、学校企画のポスターセッションの『有益性』、TA 経験の『有益性』の項目が 3 年間 80 % 以上をキープしており、それらの項目の状況の良さが見て取れる。反面、TOEIC に関する学習支援体制の『満足度』、シラバスが『役に立つ』の項目では、3 年間 60 % 以下に低迷しており、改善策を早急に講じる必要であろう。

【自由意見】

平成 21 年度および平成 22 年度では、教育システム改善として重要な指摘は特に認められなかった。なお、平成 22 年度については、以下のような少数意見があった。

- ① 「学校企画のポスター発表」を「学生主体で発表会形式で行う」というものがあった (1 件)。このアンケートは『よい』のみでは 50 % 程度であり、評価が低いといえれば低いため記載することとした。
- ② 「専攻科」進学に関して、進学前後の学生の思い (思い描くことと実際) のギャップが大きいという意見がある (2 件)。科目の『満足度』はおおむね 80 % 以上であり、ギャップが大きい学生は多数ではない様であるが、学生の進学指導に関して丁寧に行った方がよいことを示唆しているかもしれない情報なので、ここでは敢えて記載することとした。

2.3 新入生保護者アンケート

現在までに実施した新入生保護者アンケートの実施時期および回答者数等は以下のとおりである。今回の分析は、平成 22 年度および平成 23 年度における新入生保護者実施分である。

	実施時期	対象者数 (名)	回答者数 (名)	回答率 (%)
平成 18 年度	平成 18 年 4 月	215	202	94
平成 19 年度	平成 19 年 4 月	209	208	99.5
平成 20 年度	平成 20 年 3 月	210	210	100
平成 21 年度	平成 21 年 3 月	205	205	100
平成 22 年度	平成 22 年 3 月	215	207	96
平成 23 年度	平成 23 年 3 月	212	203	96

【所属学科】

回答者は全体で 203 名 (207 名) であり、新入生全体 212 名 (215 名) の 96% (96%) にあたる (括弧内は平成 22 年度の数値である。以下、同様である。)

【寮生・通学生の別】

『自宅通学生』は 63% (67%), 『寮生』は 36% (33%) であった (括弧内は平成 22 年度の数値、以下同様)。ここ数年で割合に大きな変化はみられない。学科別にみると、物質工学科と建築学科で『寮生』の割合が多い (ともに 43%)。

【通学生の通学方法】

『自転車』は 46% (45%), 『公共交通機関』は 42% (45%), この 2 つで通学生のほとんどを占めている。

【寮生活】

上記の設問で『寮生』は 74 名であったが、当設問では 71 名からの回答があった。最も多い回答は『おおむね心配ない』が 39% (34%) で、次に『やや心配』が 37% (36%) であった。これらの数値もここ数年で大きな変化はみられない。記述回答は 25 件あり、人間関係、日常生活 (食事・洗濯・朝の起床等)、親元を離れての生活、体調管理等だった。

【有明高専を最初に知ったのは】

回答数は 213 件あることから、複数の回答をしていただいた保護者がいることがわかる。『以前から知っていた』が 64% (72%) を占め、『知人 (身内、親戚等)』の 12% (7.5%), 『ポスター・パンフレット等』の 6% (4%) と続く。以前から知っていたという割合が減少したのは、教務主事室を中心に中学生の「新規開拓」によるところがおおきのではないだろうか。

【有明高専受験を決定した時期】

回答数 201 名のうち、『中学 3 年生の 1 学期頃』が 26% (34%), 『昨年 10 月頃』の 19% (24%) が続く。

【進路決定の際、有明高専の情報を何で得ましたか】

複数回答のため 529 件の回答があった。『ホームページ』の 21% (23%), 『オープンカレッジ』の 19% (19%), 『ポスター・パンフレット等』の 15% (15%) が上位を占めており、大きな変化はみられない。

【有明高専入学の決め手】

複数回答のため 511 件の回答があった。『お子様本人の希望』の 35 % (34 %), 『就職率が高い』の 29 % (27 %) が上位を占める。記述回答は 33 件あった。

【入学後心配なこと】

複数回答のため 289 件の回答があった。『学業』の 37 % (42 %) が最も多く, 『学校生活』の 19 % (15 %), 『寮生活』の 16 % (15 %) と続く。記述回答は 44 件あり, 代表的な内容として, 授業についていけない(留年あるいは退学), 通学時間が長い等があった。

【アドミッションポリシーを意識しましたか】

平成 20 年度からの設問である。回答数 195 名のうち, 『意識した』は 69 % (66 %), 『意識しなかった』は 31 % (34 %) で, 多くの受験生の保護者がアドミッションポリシーを意識していることがうかがえる。また, 学科別にみると, 機械工学科の 77 % が最も高かった。

【自由意見】

平成 23 年度は 29 名から意見が寄せられた。学校生活にかける期待と不安を率直に語られているようであり, ここ数年, 内容に大きな変化はみられない。

2.4 2年生保護者アンケート

現在までに実施した2年生保護者アンケートの実施時期および回答者数等は以下のとおりである。今回の分析は、平成22年度の2年生保護者分である。

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
平成18年度	平成18年7月	207	176	85
平成19年度	平成19年8月	215	167	78
平成20年度	平成20年9月	224	197	88
平成21年度	平成21年9月	206	182	88
平成22年度	平成22年9月	209	173	83

【お子様の所属学科】

回答者は全体で173名(182名)であり、2年生全体209名(206名)の83%(88%)にあたる(括弧内は平成21年度の数値である。以下、同様である。)

【寮生・通学生の別】

全回答数171名(182名)の内、『自宅通学生』が71%(71%)、『寮生』が29%(27%)である。学科別にみると、機械工学科が37%(35%)と最も多く、物質工学科25%(29%)と最も少なかった。

【(通学生の保護者のみ) お子様の通学方法】

複数回答可であるため、回答数は166名(169名)となっている。『公共交通機関』が33%(31%)、『自転車』が30%(30%)、『バイク』が25%(33%)だった。

【(通学生の保護者のみ) 通学方法についてどのように思われますか】

平成20年度から記述式となった設問で、本年度は11名(14名)からご意見が寄せられた。最も多かった内容としては、バイク通学に関する事で、「事故への心配」、「バイク通学の制限緩和の要望(距離の緩和)」等であった。また、バスの本数の増便の要望もあったが、これらは毎年寄せられている内容(要望)と同様である。

【(寮生の保護者のみ) 寮生活についてどのように思われますか】

平成20年度から記述式となった設問で、本年度は19名(23名)からご意見が寄せられた。それらの中でも寮の食事に関する意見・要望が多く、「食事の内容」についての改善要望であった。食事に関しては毎年多くの意見や要望が寄せられており、学生の嗜好や業者の変更等もあるが、多くの寮生が満足できるよう、今後も改善を進めていくしかないだろう。

【有明高専に入学させて】

当設問に対する回答数は169名(175名)であった。『非常によかった』は37%(31%)、『よかった』は55%(61%)、『やや後悔』は8%(7%)、『後悔している』は0%(0%)である。『非常によかった』と『よかった』を合わせた値は92%(92%)で、前回と全く同じ結果であった。記述式には、40名(49名)からご意見が寄せられた。その多くが『非常によかった』や『よかった』に関わる肯定的なものである。一方、勉強・学習面についていくことへの不安を感じているとの意見もあった。

また、平成22年度も『後悔』は0名であったが、『やや後悔』の回答が13名(12名)だった。第5回報告書で記された「9割の保護者の方が肯定的にみている反面、1割がそうでないという状況は毎年続いており、似たような意見が寄せられている」という文章は、残念ながら本年度にもあてはまる。『やや後悔』や『後悔』とする回答をゼロに近づけるために、学校全体でできる限りの取り組みを今後も継続する必要があるだろう。

【有明高専の学習指導のあり方】

当設問に対する回答数は 168 名（170 名）であった。『満足』は 36%（32%）、『おおむね満足』は 58%（61%）、『やや不満』は 6%（7%）、『不満』は 1%（0%）である。『満足』と『おおむね満足』を合わせた値は 94%（94%）で、本校の学習指導のあり方は、多くの保護者から支持されていることがわかる。記述式には、14 名（19 名）からご意見が寄せられた。その多くが「厳しい指導」、「補習の充実」、「留年の改善」等に関する意見・要望であったが、ここ数年、同様である。こうした意見・要望を改善に結びつけていく必要があるだろう。

【有明高専の学生への生活指導】

当設問に対する回答数は 167 名（178 名）であった。『満足』と『おおむね満足』を合わせた値は 83%（90%）であり、前回より減少している。一方、『やや不満』は 16%（10%）、『不満』は 1%（0%）である。記述式には、15 名（20 名）からご意見が寄せられた。その多くが、制服の乱れや茶髪・ピアス等についてもっと厳しく指導してほしいとの意見であった（「厳しいように思う」との意見もあったが）。これもここ数年、同様である。「集団・一斉指導の効果は大きい」という意見もあり、今後の指導の参考にしたいいものである。

【制服】

平成 20 年度より記述式の設問となり、61 名（72 名）の回答をいただいた。これまで同様、現在のまま制服に賛成という意見が大半を占めた。一方で、「夏服は必要ないのでは（まったく着用しないから）」、「サンダル等を許可して欲しい（蒸れて不潔で皮膚が弱いとかぶれるから）」といった意見もあった。

【お子様の課外活動（部活動）のあり方】

回答数は 155 名（162 名）名であった。まず、『所属していない』の回答は 22%（17%）であり、78%（83%）ほどの学生がなんらかの部に所属していることがわかる。次に、部に所属している学生の保護者の『満足度』の割合は、90%（93%）と非常に高い。記述回答は 12%（20%）件あり、「土・日などでも部活があつていいと思う」、「もう少し強制的にさせて欲しい」といった積極的な意見がある一方、「練習方法が物足りない」、「移動が大変」、「勉強に差し支えない程度の時間で」などの意見もあった。

【体育祭・高専祭のあり方】

『みたことがない』との回答が全体の 50%（21%）であったが、これは設問が「体育祭・高専祭」両方を問う形になっていたためではないかと思われる（2 年生の場合、1 年次の高専祭しか経験がないので）。ご覧になった方の『満足度』は全体で 95%（93%）と高いため、あり方には問題がないと考えて差し支えないだろう。記述回答は 7 件（10 件）あり、「楽しみにしている」、「毎年高専祭をやりたい」という肯定的な意見がある一方、「内容がよく分からない」、「経費がかかりすぎる」、「教育の視点が必要」という意見も挙げられた。

【有明高専のホームページ】

本校のホームページをみたことがあるかどうかの設問は、平成 19 年度から始めたものである。『よく見ている』と『ときどき』を合わせた値は 44%（47%）で、『みたことがない』は 22%（23%）であった。記述回答は 6 件（8 件）あり、「更新が少ない」、「多少見づらい」といった改善要望がある一方、「利用しやすい」という意見もあった。

【保護者と学校との連携】

『満足』と『おおむね満足』を合わせた『満足度』は 94%（93%）と高く、保護者と学校との連携は保護者から理解されていると判断される。記述回答は 7 件（14 件）あり、学生の様子や学校の状況が把握できないという不満が多かった。今後とも、保護者との連絡を増やす試みを積極的に行う必要があるだろう。その意味では、担任からメール（おそらく保護者の PC や携帯のアドレスを登録したものと思われる）が送信されたこと（複数回だと推測される）が良かったとの指摘があったことを追記しておく。

【自由意見】

平成 22 年度は、14 名（30 名）の方から自由意見を記述していただいた。内容としては、混合学級が有意義である旨の意見が多かった。また、制服姿で喫煙している学生に対するコメントがあり、これについてはさらなる指導が必要である。

2.5 4 年次編入生アンケート

現在までに実施した 4 年次編入生アンケートの実施時期および回答者数等は以下のとおりである。今回の分析は、平成 22 年度および平成 23 年度 4 年次編入生実施分である。

	実施時期	対象者数 (名)	回答者数 (名)	回答率 (%)
平成 19 年度	平成 19 年 4 月	11	11	100
平成 20 年度	平成 20 年 4 月	11	10	91
平成 21 年度	平成 21 年 4 月	7	7	100
平成 22 年度	平成 22 年 4 月	9	9	100
平成 23 年度	平成 23 年 4 月	12	12	100

平成 22 年度について、4 年時編入生は、高校の先生からの情報により有明高専の存在を最初に知ることが多い。また、入学（編入）の決め手として、就職率が高いことを挙げている人がもっとも多く、つぎに専攻科への進学が可能なことや高校・塾の先生の進路指導によったことを挙げている。入学（編入）後の心配事としては多くの学生が学業を挙げている。

平成 23 年度についても、主な傾向はほぼ同じであり、入学の決め手となるのは主に就職率が高いことである。しかし、そのつぎに挙げられたのは、学生教育が充実していること、大学に編入できること、経済的あることであり、前年に多かった専攻科をその理由に挙げる者はいなくなった。やはり、編入生の 1 番の心配事は学業である。

なお、平成 23 年度のアンケートは、Web を利用して実施した初めての試みである。

3. あとがき

本委員会が本校の教育プログラムの継続的改善に資するために行ってきたアンケートの実施・分析・報告活動は今年で足掛け 10 年目になります。第 7 回目として提出する今回の本調査報告書は、平成 21 年 9 月から平成 23 年 6 月までの実施分を前回までと比較して分析したものです。

今回の分析の結果、継続的改善という観点からは、本校の教育システムは、全体的には良好の状態であると思われます。しかし、改善あるいは検討を要する事項が依然として存在することも事実です。特に今回、卒業時・修了時アンケート結果では、評価が減少した学科では、その原因の調査が必要であると思われます。また、新入生および2年生保護者アンケートの記述欄では、良い評価を受けた点もありますが、例年通り、学校として検討を要する見逃せない意見が寄せられています。

「まえがき」で上述したように、本調査報告書は、学校の継続的改善に資することを目的にしています。本報告書が各部署において改善に利用されることを切に希望する次第です。そのためには、まず、本校の教職員各人が、本調査報告書における関係箇所を一読し、本校に対する学内外からの評価を認識することが必要であり、責務でもあると思われます。そして、関係各所で共通認識に基づく改善等の検討がなされることを切に願う次第です。

最後に、アンケートにご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

学校運営検討委員会

委員長 内海 通弘（電子情報工学科）

副委員長 小林 正幸（物質工学科）

坪根 弘明（機械工学科）

尋木 信一（電気工学科）

小野 聡子（建築学科）

谷口 光男（一般教育科）

（事務担当 原賀 亮治（総務課企画室））